# Ⅱ　基調提案

## １　研究主題

「言葉の力」を自ら学びとる生徒の育成
～学習活動としての「見通し」と「振り返り」を通して～

## ２　研究主題について

### （１）今日的課題から

学習指導要領が全面実施となり２年が経った。今回の改訂では「何を学ぶか」に加えて，「何ができるようになるか」「どのように学ぶのか」という視点が示され，その実現を図るための「カリキュラムマネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」をするための授業改善が求められることとなった。また，中央教育審議会の答申（2016 年 12 月，以下「答申」）では，現在の子どもたちが社会人となる 2030 年を念頭に置き，「社会の変化は加速度を増し，複雑で予測困難」としたうえで，「社会の変化にいかに対処していくかという受け身の観点に立つのであれば，難しい時代になる」と捉えている。これらのことからも，主体的に学ぶ態度を育む授業が求められていると考えることができる。

奇しくも，新型コロナウイルスがもたらした新しい生活様式や激変する世界情勢のように，「予測困難な社会」が現実のものとなっている。このような状況の中で私たちは，生徒一人ひとりに「未来を生き抜く力」を身に付けさせる授業を行う必要がある。そのためにも，どんな授業をどのように行っていくべきかを、私たち教師自身が問い続け，更新し続けなければならない。

また，本研究会では令和 2 年度九州地区国語教育研究大会熊本大会（以下，九州大会）において「社会生活につながる国語科教育」を主題に研究を進め，実践を行った。その中で「見通し」と「振り返り」に大きな手応えを感じつつも，学習者の資質・能力を育成するためにはさらなる研究の深化が必要であると認識させられた。

このような背景を踏まえ，また生徒が生きるこれからの社会を見据え，本研究会では，研究主題『「言葉の力」を自ら学びとる生徒の育成～学習活動としての「見通し」と「振り返り」を通して～』を設定し，研究を進めてきた。

### （２）国語科教育の課題

では，この研究主題の実現に向けて，現在の国語科教育の課題はどこにあるのか。その手がかりを探るため，令和４年度全国学力・学習状況調査の結果から考察していきたい。生徒質問紙の回答結果から考察する。

「国語の勉強は大切だと思いますか」の問いに，九割を超える生徒が肯定的に答えている。また「国語の授業で学習したことは，将来，社会に出たときに役に立つと思いますか」の問いにも約９割の生徒が肯定的に捉えている。一方で，「国語の授業の内容はよく分かりますか」の問いに対して，肯定的に答える生徒は約７割にとどまった。

また，本県・本市の課題として令和３年度の全国学力・学習状況調査の結果を見ると，「授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいましたか」の問いや「学習した内容について，分かった点や，よく分からなか

った点を見直し,次の学習につなげることができていますか」という「主体的で対話的で深い学び」に関する質問項目では,全国平均を下回っていることが分かる。

これらのことから,生徒は国語科の学習の重要性や有用性を理解しているものの,授業内容の理解や主体的に学習に取り組む態度については課題があることが分かる。加えて,授業内容の理解はもちろんのこと,課題解決に向けた主体的な学びを生み出すための「見通し」と「振り返り」が重要だと考えた。

### （３）研究主題設定の意義

主題にある『「言葉の力」を自ら学びとる生徒』は，私たちが国語科教育を通して育成をめざす生徒の姿である。

「言葉の力」とは，「国語科の授業を通して生徒に身につけさせたい資質・能力」「言葉による見方・考え方」そのものだと考えた。国語科における見方・考え方は，学習指導要領に以下のように示されている。

| |
|---|
| 言葉による見方･考え方を働かせるとは,生徒が学習の中で,対象と言葉,言葉と言葉との関係を,言葉の意味,働き,使い方等に着目して捉えたり問い直したりして,言葉への自覚を高めることであると考えられる。 |

国語科の授業では「言葉による見方・考え方」を働かせ,「言語活動」を通して，「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成していく。その「言葉の力」を生かしながら，あらゆる課題に対して，思考し，判断し，表現する生徒の育成を目指す。それが生徒にとって,さらなる「言葉の力」の獲得につながっていくはずである。

また,「学びとる」とは熊本市が目指す授業のキーワードでもあり,授業における生徒の能動的な姿である。これまでの授業では，授業者が身につけさせたい力を生徒に与えていく,生徒からすれば「教わる」授業が多く見られた。本研究会では，知識及び技能や学び方を教わるだけでなく，生徒自身がそれらを習得・活用し，学びをより確かなものにしていき，主体的に「学びとる」授業を目指している。

そこで，本研究会では昨年度までの研究の課題でもあった「見通し」と「振り返り」や「主体的に学習に取り組む態度の育成」に重点を置き，単元構想や授業づくりを行った。これまでの「見通し」と「振り返り」は，学習の動機づけの「見通し」や，学習内容を定着させるための「振り返り」に終始することが多かったが，それのみに止まらず，生徒一人ひとりの思考力，判断力，表現力を育成する『学習活動としての「見通し」と「振り返り」』を授業づくりの視点とした。また，学習課題に対する自身の考えや方略(課題解決のための手立て・計画)を吟味・修正したり到達度を評価したりする「見通し」と「振り返り」の場面を単元の中に組み込むようにした(詳しくは 4 研究の視点を参照)。

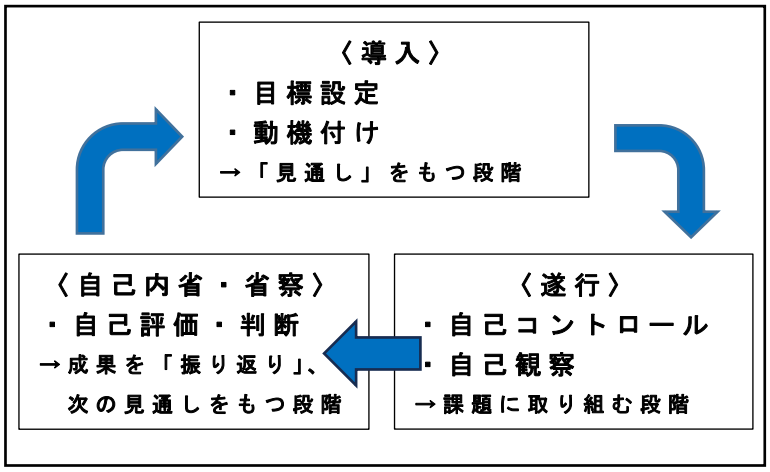
## ３　研究の仮説

学習活動としての「見通し」と「振り返り」を行う授業を積み重ねていくことで,生徒が「言葉の力」を学びとり，それらを活用する中で，課題を解決する力,主体的に学習に取り組む態度が育まれていくだろう。

## 4　研究の視点

### 視点①　「見通し」をもてる単元構想・学習課題の工夫

令和２年度の九州大会では,研究の視点の一つとして「学習意欲のサイクルを生み出す見通しと振り返り」を掲げた。「見通し」をもって学習に取り組むことで,生徒は各領域の身につけるべき力を明確にして,学ぶことができていた。




**【本研究会の学びのモデル】**

本研究では,『自己調整学習』の考えを参考にし,単元の序盤だけではなく,毎時の授業や,単元の終末においても「見通し」を行う授業を実践した。生徒が「見通し」をもって学習に臨むことで,学習に対する動機付けを行いやすくなる。また,単元の目標設定や課題解決への方略を計画する必要が生じる。さらに,単元の中盤や終末においては,自身の学びをモニタリング（自己観察）して,学習課題における思考過程や方略を調整していくことも重要である。

このように,様々な場面で「見通し」をもたせることによって視点③にある「振り返り」との相乗効果を生み,「言葉の力」を学びとる生徒の育成を目指す。

### 視点②　「試行錯誤」（確認・吟味・修正）の場の設定

生徒の実態の中で,本市の特徴として多く見られるのが,課題に対する自分なりの考えを出すと,そこで学習が完了してしまったり,教師や他者の意見を聞いて終わりにしてしまったりするという傾向である。自分の答えは正しいのか,課題の解決に向けた思考の過程はどうだったか,というまさに「主体的に学習に取り組む態度」の有無が問われる部分である。この点を克服するために,本研究会では「確認・吟味・修正」という学びの場を意図的に設ける必要があると考えた。他者との交流（対話や討論）を行わせる際に,他者の考えと自身の考えを比較したり,複数の考えを一般化したり,分類したりさせるようにした。視点をもった交流によって,自分の考えを確認することができるようになると考えた。

さらに,交流の後には再度課題に対する自分の考えを吟味・修正する時間を設けるようにした。従来の授業ではペアや班での交流の後に,全体での発表・意見交流をし、まとめや振り返りの時間となる授業形態が多く見られた。本研究では、交流の後に、自身の考えや課題解決に向けた方略を吟味・修正する場を設定するようにした。それにより、より確かな思考力や判断力を育んでいくことができると考えた。

### 視点③　学びを自覚化する「振り返り」の工夫

学びを自覚化するとは「何を学んだか」だけでなく「どのように学ん

だか」「これからの学びにどのように活用できるか(この学びが何のためになるのか)」を学習者自身が自覚することであると考えた。

令和２年度の九州大会では，振り返りシートの工夫やルーブリックの活用を行ってきた。さらに本研究では,領域に応じた振り返りの手段としてポートフォリオや、ルーブリックの活用，視点をもった振り返りの方法を模索してきた(詳細は各部会の報告を参照)。さらに「学びの自覚化」という視点において，学習用語や知識及び技能の定着も重要だと考えた。本研究会が研究を行ってきた読みの方略(読むワザ)や論理の3点セット，思考法(10の考え方)等に関しても効果的な活用を試みてきた。

「振り返り」と聞くと、単元や毎時の終盤に行うものという認識が強いと考えられる。しかし，本研究会では単元の導入時に行う既有知識(生活体験やこれまでの学習内容)の掘り起こしも「振り返り」と捉え、課題解決への方略等を自覚化するために有効だと考えた。また,単元の中盤や終末での「振り返り」は，課題に対する自身が選択した方略はどうだったか,課題に対する自分の到達度はどの程度か,なども意識させるようにした。

＜参考文献＞


・文部科学省：中学校学習指導要領解説国語編，2018
・自己調整学習研究会「自己調整学習　理論と実践の新たな展開へ」，北大路書房，2012
・ジマーマン著 塚野州一・伊藤崇達監訳『自己調整学習ハンドブック』北大路書房,2014
・平成 20～23 年度熊本大学教育学部附属中学校研究紀要「ここで学びたい！」
・平成 24～26 年度熊本大学教育学部附属中学校研究紀要
・西岡加名恵・石井英真編『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価 「見方・考え方」をどう育てるか』日本標準 2019


※本研究では福井大学准教授　萩中奈穂美先生による　令和４年度熊本市中学校国語教育研究会夏季研修会資料「言葉の力を主体的に高める生徒の育成」を参考にした。

資料〈単元の導入・中盤・終末における見通しと振り返りのモデル〉
※学習活動しての「見通し」と「振り返り」

| 導入 | 見通し・振り返りの内容 | 種類 |
|---|---|---|
| ① | 自分は過去にどうだったか | 振り返り |
| ② | 単元のゴールに対してイメージをもつ | 見通し |
| ③ | どのようにすればいいか方略をもつ | 見通し |
| ④ | 何のためか意義を理解する | 見通し |
| ⑤ | いつまでに・どれくらいの時間で | 見通し |

| 中盤 | 見通し・振り返りの内容 | 種類 |
|---|---|---|
| ⑥ | うまくいっていること | 振り返り |
| ⑦ | 小刻みに目標設定 | 見通し |
| ⑧ | ここまでに学んだこと | 振り返り |
| ⑨ | 新たに獲得した方略を使おうと計画する | 見通し |

| 終末 | 見通し・振り返りの内容 | 種類 |
|---|---|---|
| ⑩ | 付いた力とその意義の確認 | 振り返り |
| ⑪ | 習得した言葉 | 振り返り |
| ⑫ | 残された課題 | 振り返り |
| ⑬ | 今後の展望　活用場面 | 見通し |

自分は何ができて，何ができなかったのか
何が分かって，何が分からなかったのか
そして，それはなぜなのかを振り返る。